一一、軍法會議の被告となる

さて佛獨戰爭が勃發した時、エリゼ・ルクリュは歩兵大隊の一兵卒として從軍し、有名なナダール（Nadare は世界的に名聲を馳せた寫眞師で、ルクリュとの間に生涯親密な友交が續けられた。）の組織した汽球隊に加わり、彼とともに軍鳩基地を建設した。しかるに、前述した通り、國家間の戰爭に次いで國内戰が勃發し、王政派と共和派と社會主義者とが三巴の關係で紛爭するに至つた。そして急進共和派と社會主義派とが協同してコムミュンの宣言を發し、ヴェルサイユに集結した反動的政府に對抗することになつた。一八七一年三月二十五日エリゼ・ルクリュは、ヴェルサイユ政府に對して猛烈に起ち上りつつも、なお和解の可能なことを信じ、即ち『人民の叫び』（ジュール・ヴァレスの發行せる新聞 Cri du Peuple）紙上に說いて曰く「吾々の安寧は合同と協調とに存する。共和論者で同一市民でフランス人である吾々の間に交わさるべき意志表示は銃砲を以てすべきではなくて、普通選擧を以てすべきである」と。不幸にしてフランスの諸地方とパリとの

間の交通は全然斷絶されて了つた。佛國假政府大統領チエールとビスマークとは血を以てこの革命を窒息せしむべく合意した。包圍を突いての守備軍出擊に際して、エリゼ・ルクリュはシャチョン高地に於てヴェルサイユ軍の爲に捕虜となつた。彼は同僚とともに前進したが、しかし一度も發砲しなかつた。エリゼは軍法會議に於てこの事を誇を以て表言した。それは自己辯護の爲ではなくて、それが一つの事實であり、その環境に全く優越せる人道的精神の確保を示すことになるからである。

兄のエリイは、その著『コムミュンの日誌』中に兄弟達のコムミュン參加に就いて次のように書いている。

四月四日（一八七一年）彼等は三人共（エリイ、エリゼ、最若年の弟ポール）召令の時刻に出發した。負傷兵を集合する必要を生じた時、エリイは手に負傷して銃を執ることが出來ないので、疲勞者の背囊を持つことを提議した。……兄弟達は彼に先だつたので、彼は兄弟達を見失つた。夕方に彼は家に歸つた、兄弟達は歸つて來なかつた……彼は待つたが無駄だつた。どこに行つたのだろう？　諸方面に聞いて見た。大隊長の語るところによると、こうだ、

昨朝四時に吾々は、直ちにシャチョンに向つて斥候に行けという命令を受けた。何を斥候するのか？　どこへ行くのか？　何れの道路で？　如何に斥候するのか？　誰に報告するのか？　そして武器彈藥は？

ああ！　何という要求だ、シャチョンに行け、直ちに、と言うのだ。

それから！

人々はそれぞれの道を辿つた。兎も角もシャチョンの周邊に着いて、此方彼方と彷徨つた。日が出ると、護國軍は餓えて殊に渴いて、附近の居酒屋に散り散りに卓に着いた。疲勞を知らない熱心者達は、平氣で諸通路を斥候した。私はプロシヤ軍の舊い穴の中に若干の兵を伴つたが、その中に君の兄弟が二人いた。私は間もなくヴェルサイユ軍を見つけた。兵隊達も長くは彼等の穴の中に留まらなかつた。軍曹の一人が、林を透して赤旗を認め、『同僚があの堡壘の中にいる。己を好む者は己に從へ！』とて起ち出ずるや、兵達は之に從つた。

既に敵彈は雨の如く落ちて來た。君の兄弟の一人は負傷者を抱き上る爲に遲れた。ヴェルサイユ軍數個大隊は潛伏所を出て、『共和制萬歲！』を叫びながら前進して來た。パリ軍は之を眞に受けて『共和制萬歲！』と答えた。そして銃を下に向けて彼等を近よらしめた。彼等僞の友

軍は銃劍の屆く前面に接近するや、忽ち態度をかえて叫ぶ『共和制萬歳は結構だが、お前等は降服しろ！』わがパリ軍は五倍十倍の大軍に圍まれながらもなお抵抗を試みたが、幾分もたたぬ内に、わが軍は蹂躙せられ、蹴散らされ、殺され、傷つけられ、捕えられて了つた。だが、君の兄弟達はどうなつたか？　私は何とも言いかねる。……云々」

エリイ一族は野戰病院を驅け廻り、歸還の幸運を得た護國兵達にも尋ねて見た。總ゆる方面に書を送つた。……苦悶懊惱捜査探求の數日の後、漸くにして最年少の弟は看護兵中に健在し、エリゼは捕虜になつてヴェルサイユに護送されたことが分つた。

私はあの醜汚極惡なヴェルサイユ軍捕虜取扱い方を見て、忿怒に身ぶるいし、羞恥に赤面する。

彼等は、あの數日間の勞苦によつて疲勞せる、灼熱の太陽下の長途の徒歩に困憊せる、不眠不休で衰弱の極に達せる、そして奮鬪のために極端な襤褸になつた衣服を纏える、あの不幸な者達を、これ見よがしに群衆の前に徒歩行列せしめて、地方首都（ヴェルサイユ……石川）の街々に誇示するのであつた。人々は侮蔑を以て之を迎え、捕虜達の顏を穴のあくほど見つめて、之に馬鹿氣きつた嘲罵を浴せるのであつた。捕虜の中には負傷して血まみれになつた者もあつ

たが……彼等は他の仲間よりも一層非道い惡罵を受けた。捕虜達は既に兩手を縛られている。前夜までは敢えて之に向い合いもしなかつたハイカラ男どもが、今は彼等の面に唾をしかけるに至つた。美しい婦人達は、その持てる傘を以て、苦悶の汗に滴れている捕虜達の面を打擲するに至つた。一人の老人、白髮の老人は、無帽の彼等の頭上にステッキの打擊を加えたが、人々は之にブラヴォー！　ブラヴォー！　と叫ぶのであつた。見るに見かねたらしい二人の青年は、その老人に近ずいて、低い聲で諫め戒めた。すると其の時、十人ばかりの昔の軍曹、即ち休職の探偵がこの青年達に飛びかかつて、之を牢獄に引ぱつて行つた。

「肥え太つた相場師のピカールという無恥の男は、この恥ずべき混雜の中に胡麻をすつていたが、間も無く掲示したり、電報を打つたりした。曰く、『捕虜を護送せる騎兵隊は、民衆の憤激から捕虜を保護してヴェルサイユに入るのに、最大の勞苦を拂つた』。低劣なデマゴギイが、正直な人々の眼前に、これほど卑劣な容相を露呈したことは曾てなかつたことだ。――云々」

(Tome II. 24—26)

パリ・コムミュンの志士達のむごたらしい光景が、眼前に髣髴と現われる。實戰殉道者の勞苦

と屈辱とは、何時、何處に於ても同樣である。それは實に常に荊刺の道を歩むのであり、悲痛の險路を辿るのである。華やかな晴やかな花道は、眞の革命の舞臺に、めつたに展開されるものではない。

一八七一年四月五日、エリゼ・ルクリュは多くの同胞が銃殺されたサトリの營所に多くの同志とともに護送された。それから十五ケ所の監獄を引き廻わされた後にブレスト港附近のケレルンという非道い致命的牢獄に移されたが、そこでは多くのものが發狂したり、病氣で倒れたりした。エリゼがケレルン獄中にいた時日は長くはなかつたが、その七ケ月あまりの間に於ても彼は囚徒の多くが讀むこと書くことを知らないのを見て、直ぐにその教育に着手した。或る者には英語を教えさえした。それは長い流刑生活に最も必要な準備と考えたからでもあつた。彼の精神力と彼の明朗さは自ら總ての囚徒に通じた。典獄は敢てその友愛的行動に反對する譯に行かず、唯だ頗る險惡な眼を以てこれを見るのであつた。

このケレルンの監獄にジュール・シモンという當時その名を知られた哲學者上りの政治家が來訪した。『小川の歴史』及び大著『地』によつて既に有名になつたエリゼに對して讃美を寄せた彼は、エリゼに面會せんことを求め、何か不足するものは無いかと問うのであつた。だが囚徒本人

は物語つている「しかし、私はあの男を輕蔑するので、何も要求したいものはないと答えて、彼の前に出ることを拒んだ。……彼の言うには、兎に角、彼は私に安樂を與えたかつたのだとのことだ」エリゼは次でツレベロンの監獄に移された。それはエリゼが始めた同志の教育を止めさせて、學ぶ者の希望と慰安とを絶ち、教える人の歡喜を妨害するためであつた。

この間、地理學協會は彼の爲に釋放運動を試みたが、やがて協會は、エリゼが當局の指示する約束をすれば釋放を與えられるということを傳えて來た。しかしエリゼは驚き且つ憤激して「友人達は、自由の生活に還えるために、私が自らを卑下しなければならない、と考えるのか、私は自分以外のものが條件を負わすであろう、どんな約束にも應ずることはできない」と斷乎としてことわつた。かくて、些かの讓歩の言葉があれば成功したであろうこの運動は失敗に終つた。

こうして、十一月十五日、彼はサン・ジェルマンの軍法會議に引き出された。その軍法會議は彼を無期流刑に宣告した。それは彼を南太平洋の涯なるニュー・カレドニヤ島に流すことを意味したのである。それは彼の如き學者の身にとつては死刑と同樣である。しからざれば、少くとも學者たる生活の絶止である。しかも彼の精神的偉大さは、此の場合にも能く發揮された。「思う存分のことを爲せ」という絶對的モットーを堅持する彼は、極めて自然に、特殊な努力でなしに、

極めて平靜に、その科學及び人道の勞作に專心した。彼はブレスト港の牢船内に於て、エミール・タンプリエが持參した『地』第二卷の試刷を校正した。次いで前述の如く七ケ月間ケレルンの監獄で、その同志達の爲に讀方や地理や英語やを教授している時のことである、冒頭に掲げた抗議が、ダーキンを筆頭に世界各國の知名の學者の連署によつて佛國政府につきつけられたのは。そこで佛國政府も已むを得ず彼の刑罰を十年間の國外追放に減じ（一八七三年二月）彼は瑞西を亡命國に選んだ。そして彼は、手錠を着けられたまま、監獄馬車で瑞西國境まで護送されたのである。この事を評してアンリネールは『官僚という魔物は、どこまで行つても人間性を持ち得ないものだ』と言つている。この時米國大使やプトナム孃が大いに救助の爲に活動したことは前に述べた通りである。

ここで筆を轉じて少しく兄エリイの消息を語らねばならぬ。それはエリゼの活動の裏面を諒解するに甚だ便利だからである。エリイは當時の社會運動者の多くが屬したサン・シモン學派やフーリエ學派と親密な關係を結び、或る時はサン・シモン派の一銀行に關係して、銀行の機構や財政のからくりを具さに考察した。しかし彼は上からの革命に見切りをつけて、漸次に勞働者の世界

に注目するようになつた。彼が『勞働信用組合』の書記としてその定款に署名したのは一八六三年のことである。彼の思想が最も傾倒したのはフーリエ學派の『Association』の原理であつた。一八六六年には彼は『アッソシアション』という新聞の主幹となつている。『協同事業とは何ぞや』『協同運動とブルジョアジー』『ギーズのファミリステール』（これは世界的に有名なゴーダンのファミリステールのことで、協同主義を以て組織せる鑄物の工場である。）等の素晴らしい論文が表われたのは此の紙上に於てである。エリゼが協同事業に就いて立派な文章を書いたのも、矢張りこのエリイの事業を助ける爲であつたと考えられる。當時のエリゼの書翰によつても、それが察せられる。歐州革命の時（一八四八年）の革命假政府に列した有名な急進共和黨領袖ルドリュ・ローラン（Ledru-Rollin）はこの『アッソシアション』紙に一書を送り、從來の社會主義諸派を悉く批評して、茲に、この協同運動に加盟せんことを宣言したが、これに對して、エリイ・ルクリュは、フランスに於ける協同理論が一七九二年の革命家や近代社會主義者及び經濟學者の說を直接に承續するものなることを說明した。彼は曰く「フーリエ、コント、サン・シモン、カベー、プルードン、ルイ・ブラン、ピエール・ルルウ、ブシェー其の他、バスチアも加えて、すべて是等の精英達は、既に互に論じ合い、各々或る時期に於て吾々の肺腑を突く眞理を語つてい

るのである。……吾が諸學派の主唱者達の學說は、之を要約すれば、相互、獨立、連帶の大原則に歸することを吾々は諒解した」

エリイ・ルクリュは一八六一年から六二年にかけて北米合衆國セント・ルイスの『西方評論』(Revue de l'Ouest)に、一八六三年から六六年にかけて『ロシヤの言葉』(Parole Russe)に、通信員として協力し、一八六八年には、『タイムズ』紙上に『フランスよりの手紙』を連載した。一八六八年から六九年にかけて新生の國際勞働協會の運動の最も活潑な中心地たりし西班牙に旅行し、更にエヂプトに行つてスエズ運河の開通式に出席した。この運河が最初サン・シモン學徒の世界融和の大理想の下に計劃されたものであることは周知の事實である。是れより先き、彼の友人バホーフェン(Bachhofen)がその主著『母系制』(Das Mutterrecht)を出版したが(一八六一年)エリイは頗るこれに動かされて自ら思索を比較人種學、比較神話學に傾倒した。以上列記した一連の事實はエリゼの兄エリイの事業及び研究の一端を示したものであるが、この博學な兄と常に居を共にしたことが、エリゼの文化地理學に、自ら善き助言を與えたことは言うまでもあるまい。パリ・コムミュンに際しても、エリイは弟のエリゼ及びポール(醫師としてフランス

の第一人者と言われた人)と共に之に參加して、國立圖書館の管理者となり、非常な努力を以てこの時の大火災、大混亂から全圖書の保持を完うし、チエール政府軍の侵入と同時に安全な友人の家に僣伏して難を免れた。彼は『コムミュンの日誌』を書いたが、それは原稿のまま保存せられて、出版せられずにあると思う。それから彼は瑞西に脫走して一八七一年から一八七七年までツューリッヒに居を定めた。本書の冒頭に掲げたエリゼへ宛てた書狀は蓋し此處で書いたのであろう。エリゼが追放刑になつた後、瑞西に來るや、ここに再び兄弟が居を近ずけるに至つた。

エリゼ・ルクリュは一八七三年スイスに亡命して先ずルガノに落着き、ここで第二の夫人ファンニ・レルミネス(Fanny Lherminez)と同棲した。それは曾てロンドンに亡命の際に知り合つた婦人で、佛獨戰爭直前にヴァスクイユの住居で結婚したのである。